

国家資本主義とは

ーウラジオストクで考えるー

開倫塾

塾長 林明夫

Q：ロシアのウラジオストクには何をするために行ったのですか。

A：(林明夫：以下省略) 来年の秋にロシアで初めて開催される APEC の開催予定地であるウラジオストクへの経済視察団の一員として、10月5日から8日までの4日間訪問しました。主催は駐日フィンランド大使館と駐露フィンランド大使館。日本からは平石明・森塾代表や山本精一・メガネハット社長、私を含め6名が参加。フィンランドからは駐日および駐露(モスクワ)の両大使をはじめ26名が参加し、合計32名の大視察団でした。使用言語はロシア語と英語で、各々の通訳がありました。

Q：フィンランド大使館主催のロシアへの経済視察団に、フィンランドのビジネスマンと一緒に日本のビジネスマンが参加するのは珍しいですね。なぜ、林さんは参加したのですか。

A：数か月前に、私が所属する東京の公益社団法人経済同友会のロシア委員会で、「フィンランドから見たロシア」というテーマで駐日フィンランド大使をお招きして委員会を開催した際に、日本のビジネスマンとともに、フィンランドのビジネスマンがウラジオストクを訪問する視察団を企画しているので参加しないかとお招きがあったためです。

出発前日には、東京・広尾のフィンランド大使館にお招き頂き、ブリーフィングとともに正式な昼食会がありました。駐日ロシア大使をお招きして、プーチン氏が大統領選挙に出馬表明をした後のロシアについてのお話をおうかがいでき、とても有益でした。

Q：ウラジオストクはどうでしたか。

A：来年秋の APEC 開催を目指し、空港から会場のリースキー島までは大建築ラッシュでした。10%以上であった失業率が2%以下になるほど、道路や2本の大栈橋、都市型ホテルはじめ、あらゆる公共事業で「工事、また、工事」の「砂ぼこり」が充満していました。都市の作り替え、「大建設ラッシュ」といってもよいと考えます。

APEC 会場には、会議の終了後にクレムリン直轄の極東連邦大学が設立される予定です。この周辺にあった4つの大学を統合すると同時に、ロシア全域だけではなく日本も含むアジアから優秀な教員と学生、何よりも研究者を集めて、世界最先端の研究型大学院を目指すようです。

日本としても、このようなロシアの国家戦略的プロジェクトに企画段階から参画し、人類の発展のために高等教育を推進すべきと考えます。日本企業もこの極東連邦大学院に寄付講座という形で積極的に参加し、日本のプレゼンスの場を確保することも、企業としての社会的責任発

揮の方法の一つと考えます。

Q：ウラジオストクで考えたことはありますか。

A：ロシアは、民主主義国家であり大統領選はありますが、日本の国政選挙のような激しさではないようです。中国は、国会議員の選挙すら行われずに国家運営がなされています。政治家の選挙に用いるエネルギーが極めて少なくて国家の意思決定が極めて速い、急成長を果たす国家資本主義の国々とどのように対処すればよいのか、深く考えてしまいました。

また、ロシアに何回も攻め込まれて苦汗をなめ尽くしたフィンランドの考えに考え抜いたロシアとの経済外交は参考になります。APEC の開催予定地で今後ロシアにとっては軍事拠点ばかりでなく、東の玄関の役割を果たすウラジオストクに経済視察団を派遣するについて、日本のビジネスマンの参加を積極的に求め、フィンランド、ロシア、日本の発展を掲げて在日・在ロシアの両大使が全日程同行することはとてもよい印象をロシアに与え、高いニュース性を生み出しました。10月6日の記者会見には、会場にあふれる程の取材陣が訪れて熱心な取材が行われました。森塾代表の平石先生はロシアへの熱い想いを英語で語り、TV取材をされておられました。

Q：学習塾・予備校・私立学校の経営者や経営幹部の先生方にお伝えすることはありますか。

A：ロシアの人々は、皆、極めて礼儀正しく親切でした。大学構内にあるホテルに4泊しましたが、大学生は目をキラキラ輝かせながらよく勉強しているようでした。日本の隣国ロシアをもっともっと気軽に訪問し、お互いの文化や歴史を知った上で、まずは教育の面から交流を進めたく考えます。ウラジオストクやハバロフスクなどを、どんどん訪問したく考えます。

ロシアから日本への留学生にもっともっとやさしくすべきですし、ロシアへの留学生ももっと増やさなければならぬと思います。

Q：最後に一言どうぞ。

A：フィンランド大使や大使館の皆さん、フィンランドのビジネスマンの皆さんの親しみやすい雰囲気、アットホームな雰囲気に直接触れ、フィンランドがますます好きになりました。

最後に、読めばためになる本を今月も一冊御紹介します。イアン・ブレマー著「自由市場の終焉—国家資本主義とどう闘うか—」日本経済新聞出版社、2011年5月24日刊です。

日本や欧米の議会制民主主義の国々が、経済の上で競争しなければならない国家資本主義の国々の様子が詳細に紹介されています。自らの運命を考える上でも貴重な一冊です。是非、御一読を。

次回は、一年ぶりに中国からの御報告です。お楽しみに。

— 2011年10月8日記す —